

# 日本人帰国子女に見られる第二言語喪失過程 —冠詞・所有格形の縦断的調査から—

友田 路

## 要旨

This paper investigates young returnees' L2 attrition with regards to the usage of articles and possessive forms. Based on the L1 acquisition order for grammatical morphemes, children are considered to acquire possessive forms earlier than articles, which leads to the expectation that possessive forms could be more robust against language attrition than article usage in young returnees' language. However, based on the anaphoral perspectives, children are expected to attrite possessive forms earlier than articles. Results for longitudinal research showed that subjects demonstrated a higher frequency of article usage when compared with possessive forms. The narratives articulated by high L2 proficiency subjects included various possessive forms; however, young returnees with low L2 proficiency used possessive forms less frequently and showed difficulties in using articles properly. Although the Cognitive Hypothesis is asserted concerning inter-language elements such as the usage of articles and possessive forms, the Regression Hypothesis is supported regarding intra-language elements such as definite article usage and zero article usage.

キーワード：帰国子女，第二言語喪失過程，冠詞，所有格形，縦断的調査

## 1. はじめに

日本における帰国子女研究は、異文化間教育・国際理解教育等の文脈から語られることが一般的であり<sup>1)</sup>、帰国子女の L2（主として英語）の変化に関する研究は、日本の帰国子女教育の分野においても大きな注目を集めてこなかった。しかし、(財) 海外子女教育振興財団主催の外国語保持教室の近年の急速な発展や一般の英会話学校の帰国児童・生徒を対象とした教室の拡充等に示される通り、帰国子女本人および保護者の関心の中心が、帰国児童・生徒各人が海外で身につけた L2 の保持・伸長へと移行してきた（友田，2009a）。こうした帰国子女の言語活動をとりまく環境変化を踏まえ、近年、L2 保持に関する提言が活発化しているが、帰国子女の言語の変化に関わる基礎的データの提示が十分でないため、具体的かつ建設的な提言が可能となる研究レベルに至っていない。

帰国子女の言語変化や言語喪失を対象とした研究例は、発話中の不規則動詞の屈折や語彙数に着目してその著しい喪失を示唆するに留まるものが大半であり (Reetz-Kurashige, 1999 ほか)、L2 喪失研究の基礎的データの充実のためには、研究対象となる言語項目の使用実態を調査する前に、いくつかの選択肢の中からのターゲットとなる言語項目を発話したかまでさかのぼって調査することが望ましい。そのためには、調査対象となる言語項目を L2 習得・子どもの言語発達・L2 喪失の観点から解釈することに加えて、L1 固有の特徴や L1 と L2 の差異を踏まえた議論<sup>2)</sup>も必須であり、タスクで使用される題材<sup>3)</sup>の調査項目を精査する必要がある。友田 (2008, 2009b) を例に挙げれば、冠詞使用を中心に帰国子女の L2 喪失を調査しているが、本来であればターゲットとして冠詞に絞り込む前に、名詞と共起する可能性のある様々な言語項目<sup>4)</sup>の中で、どのような状況ないし文脈を踏まえて帰国子女が冠詞・所有形容詞・所有格形態素's (以下「's」) のいずれを用いたのか等を量的・質的に調査することが望ましい。また、帰国子女が被験者である場合の L2 喪失過程については、後述する仮説 (退行仮説) を採用する縦断的研究がほとんどだが、その大半が動詞を調査対象としているため、動詞以外の言語項目においても退行仮説を支持する結果が得られるかについても検証の必要性がある。様々な言語項目の喪失過程が明らかになれば、EFL 環境下の帰国子女の L2 喪失に対して、言語保持・涵養により効果が期待出来る指導案を将来的に提言することも可能となろう。

以上を踏まえて本稿では、帰国子女の L2 で名詞が比較的保持の度合いが高いとされる点を踏まえ (小野, 1989 ほか)、名詞と共起する限定詞のうち冠詞、所有格形 (所有形容詞、「's」) に着目し、帰国子女の L2 使用の実態と過程を縦断的に探ることとする。

## 2. 先行研究

### 2. 1 言語喪失研究における仮説と L2 習得・子どもの言語発達

言語習得と喪失の関係については、表 1 の仮説がよく知られているが、被験者の国籍、年齢、滞在期間、学習期間、対象とする言語、言語項目などが統一されていないため、見解は一致していない。帰国子女の L2 喪失においては、「最後に学んだことを最初に忘れる」という退行仮説 (Andersen, 1982) の主張を採用する研究が目立つのは、被験者が幼い場合、どの言語項目を十分に習得したのか、どの言語項目が有標であるのか、どの言語項目をどう認識するかを見極めることが難しいこともその理由となっている。退行仮説 (ないし言語的仮説) においては、言語の習得と喪失の順序は鏡像関係とされているだけであって、それが言語要素内の習得順序を示すのか、言語項目間の習得順序を指すのか言及されていない点に注意する必要がある。冠詞を例に挙げれば、定冠詞・不定冠詞・ゼロ冠詞等の言語項目内の習得順序と、名詞と共起する限定詞のうち冠詞・所有格形等の言語項目間の習得順序のいずれを対象とするのかは明言されていない。

仮説	特徴・参考論文
退行仮説 (The Regression Hypothesis)	習得と喪失の順序は鏡像関係。被験者は主として L2 帰国子女 (Olshtain, 1989 ほか)。
言語的仮説* (The Linguistic Hypothesis)	習得と喪失の順序は鏡像関係。被験者は主として L2 学習者 (Jordens, de Bot & Trapman, 1989)。
習得度仮説* (The Inverse Hypothesis)	習得度と喪失は鏡像関係。被験者は主として L2 学習者、L1 成人移民 (Bahrick, 1984 ほか)。
言語的特徴仮説* (The Linguistic Feature Hypothesis)	無標なものは喪失しやすい。被験者は L2 学習、L1 成人移民 (Andersen, 1982 ほか)。
認識仮説* (The Cognitive Hypothesis)	話者の言語項目の認識が個々の喪失に影響する。被験者は L1 移民 (Jordens <i>et al.</i> , 1989)。

(\*定訳がないため訳は筆者による) 表 1 言語喪失の仮説

いずれの仮説を採用するにせよ、喪失過程を縦断的に調査する際、子どもが被験者である場合は、対象となる言語要素が調査開始時にどの程度獲得されていたのかを正確に把握することが極めて難しいため、L1 幼児の言語発達過程はもちろんのこと、L2 幼児・児童の L2 習得研究の事例を踏まえることが必要である。例えば、冠詞の使用において、頻繁に起きるとされる定冠詞の過剰使用<sup>3)</sup>は、L1 幼児、L2 学習者、帰国子女や移民の子どもなど L2 児童・生徒のいずれにおいても指摘される特徴である。これは、不定冠詞よりも定冠詞の方がカバーする範疇が広いことに依るとされ、米国に移住した中国系の児童によく見られるとの報告があるように、L2 能力が限定的な場合、特定の言語項目に依拠する傾向として知られている (Lee, Cameron, Linton & Hunt, 1994)。一方、定冠詞・不定冠詞・ゼロ冠詞などの過剰使用に着目して L1 幼児の冠詞獲得順序を主張した 4 段階仮説<sup>6)</sup>においても (Cziko, 1986 ほか)、ゼロ冠詞出現の後の定冠詞の過剰般化が指摘されている。すなわち、初歩の段階で習得出来る基本的なルールだけでは実際の場面における適切な冠詞の選択は L1・L2 のいずれであっても難しいことは明らかである<sup>7)</sup>。

一方、所有格形のうち「's」に関しては、L1 幼児の自然発話において、所有格形は 6 番目、冠詞は 8 番目の習得順序とされている (Brown, 1973)<sup>8)</sup>が、L2 学習者の場合は、逆に冠詞の方が所有格形より普遍的に習得が早いという説もあれば (Krashen, 1978)、日本人学習者は L1 からの正の転移で「's」の学習は早いという反論 (Andersen, 1983) や、米国滞在中の日本人 L2 幼児の「's」の習得は非常に早いという報告 (Hakuta, 1976) もあり、L1 と L2 で習得順序についての見解は一致していない。特筆すべきは、「's」が共起する名詞の特性によって習得の時期が異なる点で、所有不可分な事物 (体の一部や血縁関係のある者など自己と切り離すことが難しい事物) は幼児の MLU<sup>9)</sup>が 1.75 のごく初

歩の時期から習得出来るのに対して、所有可分な事物（服、玩具、食べ物、飲み物など自己と切り離せる事物）では MLU2.75 にまで数値が上昇し幼児の言語能力が発達しないと習得は難しいとされている（Brown, 1973, p. 196）<sup>10)</sup>。

所有格形のうち所有形容詞に関しては、L1 幼児の習得時期および特徴に関しては「早期に習得される」以上の示唆を得ることは難しい。L2 学習者を対象とした L2 習得の分野においても所有形容詞に関する研究は見るべきものがない。しかしながら、所有形容詞の限定詞的な役割（Quirk *et al.*, 1972）を踏まえた上で、幼児は生得的に「所有物 (property)」と「領域 (territoriality)」という概念を理解し、所有者 (the possessor) がその所有物 (his possessions) を所有 (possessive) するという関係概念を子どもも表現できるという Brown (1973) の説明から、「's」と同様の特徴を示すことが予想される。

先に述べた退行仮説を踏まえて、上記の冠詞、所有格形の習得と喪失を再考すると、L1 幼児の場合、「's」は 6 番目、冠詞は 8 番目の習得順序であることから、幼児期を海外で過ごした帰国子女の言語喪失の順序はそれと鏡像関係を示すはずであるため、冠詞の喪失が「's」の喪失より早いことが予想される。更に、「's」は、自己と切り離すことが難しい所有不可分の事物と共起する際に L1 幼児では習得が早いのであるから、帰国子女の場合もこのカテゴリーに分類される名詞と共起する「's」の喪失は遅いことも想定出来る。一方、所有形容詞に関しては、明確な習得時期などの説明が得られないため正確なデータに則った予測とは成り得ないが、文法項目の働きとして「's」に類似の特徴を示すことから、「's」と同様の特色が期待される。このため L1 幼児の冠詞習得の 4 段階仮説を踏まえると、習得と喪失は鏡像関係を示すのであるから、定冠詞、所有格形（'s・所有形容詞）の順番に喪失が進むことが予想される。

## 2. 2 冠詞・所有格形（所有形容詞・形態素 's）が対象とするカテゴリー

子どもの言語発達に関して先に言及した手法とは異なる研究アプローチが採用されるようになったことは注 8 でも触れたが、一見、言語とは直接的な関わりを持たないかに見える、自己・他者の理解や共同注視の認識、また、カテゴリー化につながるパターンの発見など、基本的な認知構造の獲得過程を通して子どもの言語が発達するという知見が注目されるようになり（Tomasello, 2003; Bloom, 2000）、この概念を応用して、事物をカテゴリー化し、そのプロトタイプと周辺事象の構成のいずれかに属性を定め、各カテゴリー間の上位・下位レベルを規定することでカテゴリー階層を構築するという理論が知られるようになった（早瀬, 2002 ほか）。これに対し、カテゴリーの成員のどれがプロトタイプなのか逸脱しているのかを把握する必要性が指摘されたことから、全体を俯瞰する視点でカテゴリーに属する成員を規定しようという試み<sup>11)</sup>が行われるようになった。その結果、語彙や言語項目の持つ意味だけでなく背景知識として社会・文化的常識や百科事典的な知識をも取り込んだ解釈が行われると同時に、該当表現に合致しないカテゴ

リーの成員にも文脈情報という補正が加わることでカテゴリーに組み込めるというアプローチも採用されるようになった（早瀬, 2002）。

このような、経験に基づく知識を抽象化し知識構造を構築していくという考え方は、冠詞の適切な使用に「ネイティブ・スピーカの言語直感」の分析の必要性を説いた織田（2002）の主張にも通じるものであり、織田は、定冠詞・不定冠詞それぞれがカテゴリー化されるプロセスに焦点を当て、不定冠詞は数概念の *one* が意味する「一つの」という数の表現から脱却し、可算で且つ個体制識別を補完する識別表示の標識としてカテゴリー化されてきたと指摘する一方、定冠詞については、*that* が意味する「目撃状況内の現前存在」（織田, 2002, p. 81）という特定性の条件の認識を基盤としているため、指示対象がテキスト本文に求められる同一指示的なテキスト内「前方照応」が基本的な使用条件となると主張した。続けて、定冠詞の持つ「内部照応」には「前方照応」だけではなく、後続の関係節によって特定性が断定される「後方照応」の存在も指摘したが、このような冠詞使用の実態を積算してもその総和が正しい冠詞使用のルール的全貌を明らかにしないことから、「百科事典的社会知識、社会慣習的思考パターンなど、話し手と聞き手との間に、的確・適正な指示・同定を達成させるために十分な情報知識が」（織田, 2002, p. 45）共有される枠組みの概念の成立が冠詞のカテゴリー化の背景知識として要求されるとした。照応と先行詞の関係に関しては、坂原（2000）も、照応は「同一指示照応」と「非同一指示照応」に分けられ、「直接的照応」と呼ばれる「同一指示照応」であっても、「照応表現の意味内容が言語的文脈あるいは一般的知識から予想できるなら、照応表現に先行詞に含まれない情報が含まれてもよい」（同, p. 221）場合もある一方で、「間接的照応」として知られる「非同一指示照応」の場合は、「先行詞が設定したフレームの中にすでに存在するが、まだ言語化されていない要素を同定」（同, p. 222）するとした<sup>12)</sup>。

一方、所有形容詞に関しては、前述のフレームの概念を導入することで冠詞との弁別が可能となるとされた。定冠詞句においては、前文が活性化した言語フレームに含まれる項目であれば、明示的に言語的手段で導入されていない名詞句まで「談話資源のすべての領域の探索指令となりうる」ため照応関係を結ぶことが出来る（坂原, 1996）が、所有形容詞の場合は明示的な先行詞を必要とするため、冠詞に比べ限定的な場面でのみ使用することとなる。つまり、所有形容詞は、不完全同一性の照応が不可能であることから、「付加された属性を受け継がない」で「役割関数」だけを受けることで前文とは異なるパラメータを使うということは出来ない（坂原, 2000, p. 232）ため、「個体レベルの照応」しか寛容されず、フレームに含まれる項目まで照応出来る冠詞の許容範囲が広いのに比較して、所有形容詞の制約は大きいと解釈できる。これと同様の特徴が「*'s*」についても想定されるが、加えて、初期の子どもの言語発達過程においては、MLU の低い幼児の自然発話のほぼすべてが、前後の名詞を *have* でつなげ書き換えることが出来る典型的な所有の概念がプロトタイプとして使用されることから（Brown, 1973; Tomasello,

1997 ほか)、帰国子女の用いる所有格形は、明示的な先行詞を必要とするごく基本的なカテゴリー成員であることが予想される。以上を踏まえ、フレームの概念に含まれる項目まで幅広く照応出来る冠詞と比較して、所有格形が照応する対象は限定的で汎用性が低いため、言語喪失過程では冠詞と比較して所有格形の使用頻度は低下することが予測されることから、前述の退行仮説とは異なり、帰国子女の言語喪失には、個々の言語項目の認識や汎用性が喪失過程を決定する、表 1 の認識仮説に近い傾向が予想される。

### 3. 研究課題

以上の先行研究の冠詞、所有格形に関する様々な知見からは、冠詞とりわけ定冠詞に備わる、一般的常識やプロトコルまで含めた談話資源のすべてを利用出来るその汎用性の高さと、対する所有格形の限定的な使用と制約の大きさが示唆された。これを踏まえて本稿では、帰国子女の発話言語に見られる冠詞、所有格形の使用状況とその変化を縦断的に調査し、以下のどちらの想定に近い現象を見ることを出来るかを検証する。

1. 子どもの言語発達の知見からは、所有格形の方が冠詞より習得順序が早いことが示唆されるため、その鏡像関係となる喪失過程が予想されるが見受けられるのであれば、退行仮説が支持される。また退行仮説に則れば、所有格形の中でも、所有不可分な事物と共起する場合より喪失が遅くなる。
2. 冠詞と所有格形のカバーする範疇に注目すれば、冠詞の汎用性が高いため喪失が進んでも冠詞が所有格形よりも保持される可能性が高い。言語喪失過程で冠詞に比べ所有格形の使用頻度が低下する傾向が見られるのであれば、認識仮説が支持される。

### 4. 調査方法

#### 4. 1 被験者

被験者は、就学前および低学年で帰国した小学校 4 年生の日本人児童 6 名<sup>13)</sup>である(表 2)。被験者はいずれも(財)海外子女教育振興財団主催の外国語保持教室に小学校 2 年生より前から通う児童で、教室の資料や保護者との面談から被験者の家庭環境、保護者の職業、生育環境、英語保持の動機などが類似していた。帰国後の家庭での英語保持への取り組み方や活動はどの家庭も熱心ではあったが、特に被験者 6 の家庭は註 17 のように保持活動に前向きな姿勢が他の被験者に比べて際立っていた。また、喪失前の言語能力の基礎資料となる帰国直前・直後の言語データの収集は難しいため、本稿では、言語喪失研究で一般的な、最初に収集したデータを基準とした (Tomiyama, 2000 ほか)。

被験者	1	2	3	4	5	6
出生地	日本	米国	日本	日本	日本	米国
滞在国内	米国	米国	米国	米国	米国	米国
出国年齢 <sup>14)</sup>	5;1	出生	4;4	3;8	3;8	出生
帰国年齢	6;11	5;3	7;8	6;1	6;1	3;4
滞在期間	1;10	5;3	3;4	2;5	2;5	3;4
測定初回年齢	8;4	8;3	8;2	7;6	7;6	7;3
測定最終年齢	10;4	10;3	10;2	9;7	9;7	9;5
帰国後期間	5;5	5;0	2;6	3;6	3;6	6;1
就学歴 <sup>15)</sup>	G1, SS	N, SS	K, G1	K, G1	K, G1	N, DC
帰国前 L2 力 <sup>16)</sup>	高い	高い	高い	高い	普通	普通
2年生時英検級	無	2	無	4	4	5
4年生時英検級	2	2	無	3	3	3
兄弟構成	妹	兄	兄	双子	双子	姉
性別	女兒	男兒	女兒	男兒	男兒	女兒
家庭英語保持 <sup>17)</sup>	6	5/2/4	3	4-5/2/2		15/15/2
進級試験結果 <sup>18)</sup>	合格 H	合格 M	合格 M	未受験	未受験	不/合 C
2年生時評価 <sup>19)</sup>	最上級	最上級	上級	中上級	中級	中級

表2 被験者データ

#### 4. 2 調査方法

本稿では、註3のMayer (1969)の '*Frog, where are you?*'を用いた英語の「お話づくり」の手法を採用し、小2、小3、小4時の3回のデータ収集を実施した。あらかじめ被験者には絵本を時間制限なく見せ、英語の語彙を思いつかない場合は随時実験者に尋ねてよいこととした<sup>20)</sup>。3回の実験ともに被験者と実験者の間には衝立を置き、実験者からはその絵本が見えないことを明示的に示し聞き手と話者には限定詞を決定する上で重要な「前提性」が共有出来ないことを提示した。2回目のデータ収集時はすべての被験者に学習効果は見られなかったが、3回目のデータ収集時は全員が「この絵本を見たことがある」と認識した。しかしながら、絵本の主題が「いなくなった蛙を男の子と犬が探し回り最後に家に連れ帰る」ため、森・丘・崖・池など幾つもの場面が用意されている上、例えば「鹿の角に引っ掛けられた主人公と追いかけてきた犬が崖から落ちる」という cliff event など、何を動作主に何を非動作主に想定すべきか複雑な状況が設定されていることから、以前読んだ経験があったとしても学習効果が容易に働かないとするのが Frog story を用いる調査の慣例である。被験者の発話データは録音後すべて書き起こされ、英語母

語話者<sup>21)</sup>と筆者が限定詞の正しい用法の評価を行った。英語母語話者との判断のずれについては意見交換を行い、見解を統一させた。また、今回の課題では、絵の状況を表す適切な英語語彙が発話出来ない場合、共起する限定詞の使用に影響を与える可能性がある為、L2 能力の指標の一つである子ども向けの語彙理解能力テスト<sup>22)</sup>を実施し、被験者の語彙発話能力を測定した。

## 5. 結果

### 5. 1 TLU 値と語彙テスト

文法項目がどの程度正しく使われているかの指標である TLU 値 (Target-like Usage)<sup>23)</sup> を、発話に現れた冠詞使用を対象に測定した結果は表 3 の通りである。

被験者	1	2	3	4	5	6
2 年生時 TLU 値	73.3	86.0	78.5	33.3	56.1	53.6
3 年生時 TLU 値	81.4	68.0	80.2	28.3	31.6	53.0
4 年生時 TLU 値	80.0	75.5	73.4	19.7	41.1	30.9
4 年生語彙年齢	7;11	3;7	4;6	2;10	3;7	6;3

表 3 冠詞使用 TLU 値の推移と推定語彙年齢

TLU 値と冠詞使用の正確さは正の相関となるため、この数値が高いほど冠詞使用の基本ルールを理解していることを表す。L2 保持には TLU 値 80 を臨界とする説もあるが (Reetz-Kurashige, 1999)、被験者 1, 2, 3 の冠詞使用 TLU 値は比較的安定して高く、一方の被験者 4, 5, 6 は低位に留まった。被験者 1 と 3 の TLU 値の推移は多少異なるが両者ともに高水準を保持している背景には、二人は女子児童で真面目にタスクに取り組み、日常的にも英語保持活動に前向きに取り組んでいることが挙げられる。被験者 2 の TLU 値が 3 回目のデータ収集時に上昇したのは注 17 の理由によると思われるが、同様の傾向を被験者 5 も示したがその要因は後述のように被験者 2 とは異なる。被験者 4 の TLU 値の推移は典型的な L2 喪失パターンであり、TLU 値が低く留まった被験者 5, 6 の TLU 値下降パターンがなぜ被験者 4 と異なったかだが、まず被験者 6 の TLU 値が 3 回目に下降したのは、注 17 の理由によると推測出来る。被験者全員の所有形容詞、「's」の TLU 値も同様に測定したが、表 4 が示すように使用頻度そのものも少ないこともあり、被験者 6 の初回の「's」が日本語の影響が転移した使用法である以外は、文法的な間違いは見られなかった。被験者 6 は日本語の「～のところ」から発想される place を the boy's (0.763 秒のポーズ) hole's place (男の子の・・・穴のところ) や the dog's place (犬のところ) また the pond's place (池のところ) のように多用しているが、いずれもピア英語の顕著

な特徴である。

また、語彙理解能力テストの結果、被験者によるばらつきが明らかとなった。語彙年齢の比較的高い被験者 1, 3, 6 は「お話づくり」において適切な英語語彙を選択することに支障をきたすことはほとんどなかったが、語彙年齢の低い被験者 2, 4, 5 は、たびたび該当する英語語彙を日本語で実験者に尋ねた上で発話を続けた。実験者は、該当する英語語彙を尋ねられた際、その場面状況・文脈から出現が期待される冠詞を共起させて名詞句を示したが、実際には被験者 4 は名詞句だけを聞き取って使用することが多かったため、冠詞使用の文法的な正確さの指標である TLU 値が減少を示した。一方、被験者 5 は 2 回目のデータ収集時に、被験者 4 と同様、該当英語語彙を尋ねて冠詞を脱落・誤用する傾向を示したため TLU 値が下降したが、3 回目のデータ収集時に、名詞句の発話数の減少を補完するため「言い換え方略」を独自に編み出した結果、文法的に正確に使える汎用性の高い簡単なフレーズ<sup>24)</sup>を用いて場面状況を表すことが出来るようになり、先に指摘した通り結果的に TLU 値が上昇した (友田, 2008)。被験者 6 が TLU 値と比較して語彙年齢が高いのは家庭での言語保持活動の成果であり、逆に被験者 2 の語彙年齢が低いのはタスクへの取り組み方が前向きでなかったことによる。

## 5. 2 定冠詞誤用割合・ゼロ冠詞誤用割合

冠詞使用の TLU 値については、被験者 1, 2, 3 と被験者 4, 5, 6 で異なる傾向を示すことが明らかとなったが、その内容を精査すると、被験者 1, 2, 3 は定冠詞の誤用の割合が多く、一方被験者 4, 5, 6 ではゼロ (Φ) 冠詞誤用の割合が多いことが表 4 より示唆される。

被験者	1	2	3	4	5	6
2 年定冠詞誤用割合	20.0%	11.0%	24.0%	8.5%	22.5%	14.0%
3 年定冠詞誤用割合	19.0%	19.0%	15.0%	0.0%	0.0%	20.0%
4 年定冠詞誤用割合	20.0%	22.0%	20.0%	0.0%	10.9%	15.0%
2 年Φ冠詞誤用割合	3.0%	0.0%	2.0%	57.4%	22.5%	32.1%
3 年Φ冠詞誤用割合	0.0%	4.2%	10.3%	63.0%	50.0%	17.0%
4 年Φ冠詞誤用割合	2.0%	0.0%	11.7%	72.7%	34.6%	54.0%

表 4 冠詞総数・定冠詞誤用割合・ゼロ冠詞誤用割合

誤用の判断は前述同様に註 21 を基準とした。定冠詞の誤用の割合には被験者間で統計的な有意差<sup>25)</sup>はないが、ゼロ冠詞使用の場合は、二元配置分散分析 (繰り返しなし) によると被験者間で有意差があり、多重比較検定によると被験者 1 と 4、1 と 5、1 と 6、2 と 4、2 と 5、2 と 6、3 と 4 の間で 5% 有意差があった。TLU 値の高い被験者と低い被験

者には明らかに異なるゼロ冠詞使用傾向が示されたことから、帰国後年数を経ても TLU 値の高い被験者群は汎用性の高い定冠詞を過剰使用し続ける段階にあるが、TLU 値の低い被験者は定冠詞使用よりもゼロ冠詞使用の増加が顕著で、発話中の冠詞そのものが脱落する喪失傾向が示唆された。

### 5. 3 所有形容詞・形態素'sの頻度

定冠詞の発話に比べ、「's」・所有形容詞の発話は限定的に留まった（表 5）。所有形容詞の使用は冠詞 TLU 値の高い被験者のみに見られ、その使用は his dog、their children（被験者 1）、his head（his は鹿、被験者 2）、his head（鹿）、his clothe（主人公）、their family（蛙、いずれも被験者 3）と限られているが、children や family などは Brown のいう自己と切り離すことが難しい所有不可分な事物に所有形容詞を使用している。

被験者	1	2	3	4	5	6
2年「's」頻度	1	0	3	0	0	5
3年「's」頻度	0	1	4	7	0	2
4年「's」頻度	0	0	5	3	0	2
2年所有形容詞頻度	0	1	0	0	0	0
3年所有形容詞頻度	0	0	2	0	0	0
4年所有形容詞頻度	2	0	5	0	0	0

表 5 形態素's・所有形容詞の頻度

一方の「's」の発話は、限定的な使用であるため TLU 値の高低で顕著な差は見る事が出来なかったが、例えば被験者 3 の使用に着目すると、初回は beehive と発話出来たが、2 回目では bees' nest となり、3 回目には bees' house と縦断的に変化が見られた。データ収集の回が進み、該当する英単語が瞬時に思い浮かばなくなっても、「's」を用いることで「お話づくり」を続行しようと、どの被験者も xxx's house という言い方を多用して、蜜蜂、モグラ、梟の棲家を表現しようと試みている。

## 6. 考察

「お話づくり」を通して帰国子女の言語に見られる冠詞、所有格形の使用状況とその変化を縦断的に調査することが本稿の目的であったが、以下が示唆される。

1. 言語喪失研究の知見から、所有格形が冠詞より喪失が遅いことが予想されたが、「お話づくり」のタスクの場合、冠詞 TLU 値の低い言語能力の低い被験者は冠詞

の脱落が縦断的に顕著ではあるが、被験者によっては言語喪失が進んでも「's」を用いた者もいた。しかしながら圧倒的に冠詞の発話数の方が多いことを考えれば、所有格形の方が喪失が遅いであろうとする退行仮説は言語項目間においては正しく現れなかった。しかし、言語項目内の使用変化に着目すれば、所有不可分の事物と共起する「's」は帰国後の時期が経っても出現が見られた点と、TLU 値の低い被験者には冠詞の脱落が顕著な点からは、退行仮説が支持された。

2. 定冠詞の持つ汎用性の高さから帰国子女のナラティブにおいても定冠詞の過剰使用が予想されたが、TLU 値の高い被験者の所有格形の発話数の少なさから、言語項目間の喪失において認知仮説が支持された。しかしながら、冠詞脱落が顕著な冠詞 TLU 値の低い被験者のナラティブにも所有不可分の事物と共起する「's」は出現することから、言語項目内においては1で指摘した退行仮説が支持された。

以上の結果から、帰国子女のナラティブの縦断的調査から、定冠詞使用・ゼロ冠詞使用ないし所有可分・不可分の事物と共起する「's」など各々の言語項目内においては退行仮説が支持された。しかしながら、冠詞と所有格形など言語項目間においては、言語項目の汎用性やフレームの概念への照応の可能性から認識仮説が支持された。本稿で扱ったタスクが「お話づくり」という特殊なケースであることもあり、この結果が一般化出来るかについては議論を要するが、以下に考察を試みる。

定冠詞の汎用性の高さや出現頻度の多さに関しては、前述の L2 習得、子どもの言語発達などいずれの先行研究からも指摘されていることで、ここで改めて考察に加えることはない。帰国子女の場合、本稿の縦断的研究の結果から冠詞 TLU 値の低い被験者は、言語喪失が進むと、定冠詞に依存することも出来ず冠詞そのものを脱落する傾向を示したが、そのような冠詞使用の変化は言語喪失研究の退行仮説が示唆する通りである。

着目すべきは、言語喪失の進んだ被験者であっても「's」はある程度使える点である。即ち、冠詞誤用が顕著であっても、英語母語話者の L1 幼児が冠詞より先に習得しているとされる「's」は、低頻度ながら帰国子女も発話することが出来る。ここで被験者 6 の発話に着目すると、日本語からの影響が顕著であり、先に指摘したように「~のところ」という日本語の転移とみられる's place を多用しているが、「's」を日本語の「の」ととらえていると想像出来る。ゼロ冠詞使用が多く見られる言語喪失段階であっても、日本語からの転移ゆえに「's」の使用は比較的安定して行うことが出来たと思われる。

一方、「's」と似た働きを持ちながら、冠詞 TLU 値の高い被験者のナラティブにしか見ることが出来なかった所有形容詞に着目すると、言語能力の比較的高い被験者にしか見ることが出来ない。所有形容詞が指し示す名詞は、冠詞のカバーする領域の広さとは異なり、不完全同一性の照応が不可能であるという性質を持つことは前述の通りである。それに加えて、「お話づくり」という実験的環境においては、所有形容詞によって示され

た名詞が、結局誰の何に所属するかが絵を共有しないため非常に不明確となり、聞き手との前提性を保つことが難しいため、使用が回避された可能性が指摘出来る。被験者と実験者の間には、前提性の共有を阻害するために、常時大きな衝突が立てられていたため、例えば **family, head, children** など所有不可分な事物について所有形容詞を使用することは話者・聞き手双方にとって理解しやすい事象であった。一方、**his cloth** も今回のタスクでは洋服を着る人間は一人しか登場しないため、話者と聞き手の前提性に理解を損なうものではなかったため使用されたと思われる。

## 6. 結論と今後の課題

帰国子女の冠詞・所有格形の使用状況の把握が本稿の目的であったが、言語項目間と言語項目内で想定される仮説が異なることが示唆された。

但し、実験環境やタスクの内容などによって実験結果が左右される場合があることは否めない。今回調査対象とした「お話づくり」は子どもを対象とした言語研究でよく知られた材料ではあるが、使えない言語項目は使用を回避できるため、名詞と共起する冠詞・所有格形の縦断的な調査としては適切であったとは言い難い。今後はタスクの選択も含め、さらに被験者を増やしデータ収集と実験を試みて、分析を行いたい。

■本調査に御協力下さった財団法人海外子女教育振興財団の関係各位ならびに財団主催の外国語保持教室に通う帰国児童・生徒、保護者の皆様方に感謝の意を表します。

## 註

- 1) 2009年6月現在、東京学芸大学を中心に財団法人海外子女教育振興財団40周年史を編纂中であるが、言語学の観点は取り入れられていない。
- 2) 言語のそれぞれの特徴や言語間の差異に着目した研究として代表的なものは、Snape (2008)やChierchia (1998)が主張する *nominal mapping parameter* (名辞写像パラメータ) の枠組みで、名詞句のパラメータに着目し分析することで各言語に現れる限定詞 (*determiner* としているが実質的には冠詞) の用法の説明を試みている。このパラメータによると、名詞句には2つの性質があり、a) 限定詞なしで項になれるかどうか (*argument*)と b) 限定詞の項として述語的に機能するかどうか (*predicate*)が、言語の特性を規定するとした。この枠組みに従えば、言語は大きく分けて3種類に分類出来るとされ、1) 日本語や中国語などの[+arg(ument), -pred(icate)]タイプは名詞句単独で常に項になれる、2) フランス語やスペイン語など[-arg, +pred]タイプでは名詞句は単独では項になれず、限定詞の述語になるので必ず冠詞が必要である、3) 英語やドイツ語など[+arg, +pred]タイプでは、[+pred]の場合は限定詞を伴って初めて項になれるが、物質名詞などの名詞によっては[+arg]になるため冠詞がなくとも項になれると区別した。しかしながら、この

---

枠組みでは、同系列とカテゴリー化された言語間の差異を説明できないばかりか、a) と b) の性質の違いは意味論的には「種(kind)」と考えられるかそうでないかの違いにつきるといふ批判もある(吉田, 2003)ため、本稿ではこの枠組みは用いないこととした。

- 3) 本稿で採用した材料は、Frog story と呼ばれる子ども向きの字のない絵本 (Mayer, 1969) で、被験者はすべて児童であるため、小説的な技法に満ちたナラティブの発話は予想していない。また、予備的調査で成人の英語母語話者に施行した際、このタスクにおいては、初出の名詞句には不定冠詞が共起するという原則が守られていることを確認した。そのため、定冠詞を小説の最初の文中から使用することで読者に登場人物がずっと以前からそのステージの上にいるような効果を狙う最近の小説技法 (Turner, 1973) は本稿のタスクでは想定しないこととする。Frog story を用いたデータ収集方法は、子どもの言語調査では広く知られた手法であり (Slobin, 1985 ほか)、帰国子女を対象とした第二言語喪失研究においても一般的である。
- 4) 名詞と共起する名詞句の限定表現ないし限定詞には、指示詞 (demonstrative) と数量詞 (quantifier) があり、前者には冠詞 (article: the, a(n), 無冠詞)、指示形容詞 (demonstrative adjective: this, those など)、所有形容詞 (possessive adjective: my, his, Fred's など) が、後者には疑問形容詞 (interrogative adjective: what, which など)、数量形容詞 (quantitative adjective: all, many, two など) が分類される (池内, 1985) が、本稿のタスクで所有形容詞と冠詞がいずれも同じ名詞と共起したことから、この二種類を調査対象とした。Quirk *et al.* (1972) に依れば、所有形容詞 (my, our, her) は冠詞といずれかしか名詞と共起出来ないことから限定詞の範疇と考えられる一方で、所有代名詞 (possessive pronouns) には my daughter's, Mary's, her などが名詞と共起して (Mary's book) 属性を示す限定詞的な役割 (determiner function) が備わる場合と the book is hers (Mary's) など述語的に補語となりうる名詞的役割 (nominal function) となるケースが指摘されているが、本稿では被験者の発話に現れた前者のみを対象とする。また、形態素 ('s) を名詞に接続させる所有格形は所有形容詞の範疇に分類されるが、早瀬 (2002) が指摘するように、この 's には所有の概念はもちろんのこと、部分全体関係や抽象的な主題関係に基づく例 (John's employment) など様々な用法があるため、本稿では所有形容詞と形態素 's は別の調査項目とした。
- 5) 定冠詞の過剰使用に関しては Tomoda (2008) および友田 (2008, 2009b) の記述に詳しい。
- 6) Cziko (1986) や Thomas (1989) らは、子どもの冠詞習得には 4 段階があるとする「4 段階 (Four-stage) 仮説」を主張し (友田, 2008, 2009b)、L1 幼児の冠詞習得はゼロ冠詞が目立つ混沌とした使用 (第 1 段階) から定冠詞の過剰使用の出現 (第 2 段階) 後、一部の幼児に不定冠詞の過剰使用が確認され (第 3 段階)、習得 (第 4 段階) へ進むとした。
- 7) 談話内容の理解、文脈の把握、状況判断、文化的に正しいとされるプロトコルの習得、百科事典的知識、聞き手の「前提性」の理解、L1 の冠詞体系の有無とその転移などが複雑に絡み合っ て正確な冠詞が導かれるとされている (Pica, 1983 ほか)。
- 8) Brown (1973) の調査では所有格形 (possessive) としているが例として形態素 's が挙げられている。

---

また、子どもの言語発達を扱った 1970 年代の研究においては、英語圏の子どもの言語データをもとにした Brown (1973) に見られるように、子どもは形態素や言語構造を順番に獲得していくと考えられていた。しかし 1980 年以降は、多言語の子どもの発話データを横断的に収集した結果から、新しい研究アプローチが現れ、子どもの言語発達は段階を踏んだものではなく、自然に L2 を獲得した L2 使用者と同様、混沌とした状態の中で、よく耳にする使用頻度の高い言語項目をまず核として習得し、そのパターンを応用しカテゴリー化することでアイテムごとに言語を獲得していくとした(Tomasello, 2003)。その結果、どの順番で言語項目や形態素が獲得されるかという研究は主流ではなくなった(Behrens, 2009)。

- 9) MLU (mean length of utterance) とは平均発話長のことであり、Brown (1973) が提唱した子どもの言語や文法発達の指標である。Brown は、子どもの言語発達をその年齢よりも MLU の違いに依るとした。子どもの自発発話に現れた意味の最小単位である形態素の数を 1 発話ごとに求め、それを 100 発話について平均した値を MLU と定めているが、MLU が 4.0 を超えると、言語発達の指標としての MLU の適正性は低くなるとされている (岡本ほか, 2002, p. 618)。
- 10) Brown (1973)は、“alienable” possessives と “inalienable” possessives の概念を紹介している。
- 11) この概念はフレーム(Fillmore, 1982)として知られている。
- 12) このような非同指照応としては、I read an interesting book. The author is a good friend of mine. という例文で、本というフレームを導入することによって著者を推測することが出来るという指摘 (坂原, 2000, p. 223) や、L1 幼児の冠詞習得の 4 段階仮説において、Thomas (1989) が定冠詞の用法を 21 に分類した際の一つ specified by entailment (含意による特定) の例とした I approached his front door and rang the bell. で、ドアという語彙が話者と聞き手の間に「ドアにはベルが付いている」という相互理解 (前提性) と特定性を生むとする説明がその代表的である。
- 13) 実際には実験に参加した被験者は 7 名であったが、1 名は「お話づくり」を My name is ... で始まる一人称で 3 回ともに行ったため、他の 6 名に比較して所有形容詞 (my dog, my frog, my house など) の発話が極端に多くなった。このためこの被験者は本稿のデータからは除外した。
- 14) 年齢、滞在期間などで 5;3 と記述のあるものは、5 歳 3 か月ないし 5 年 3 か月を意味する。
- 15) 就学歴のうち、N はナーサリー、DC はデイケア、SS はサマースクール、K はキンダーガーテン、G1 は小 1 を指す。被験者の保護者との面談の結果から、被験者 1 はカリキュラムが充実しているサマースクールを 3 か月体験し、被験者 2 は教育レベルの高さで有名な東海岸のサマースクールを毎年 3 か月体験し、かなり高度な教育を受けていたことが分かった。更に、被験者 4 は G1 ではあったが gifted children 向けの取り出し授業で G2 の課程まで修了していた。
- 16) 帰国前の L2 能力は厳密なテストから評価することは困難なため、本稿では保護者との面談から判断した。すなわち、通常の保育・教育施設での年齢相当のカリキュラム以上の特別なプログラムを履修したケースを調査者の判断で L2 能力が高いと判断した。
- 17) 家庭での英語保持活動は初回データ収集年には被験者 6 を除いてはほぼ同様の傾向を示した。

---

いずれの数値も週ごとの英語保持活動の時間を意味し、外国語保持教室から与えられたワークシート、日記、読書、また米国で放映されている番組の視聴、映画の視聴、英検の勉強などが代表的な活動であった。被験者1は週に1時間、財団の教室とは別に英語母語話者と個人レッスンを行っていた。被験者3の家庭における英語保持活動の時間は若干少ないが、この被験者の通学する私学では英語の時間が週2時間あったため、合計では週5時間の英語保持活動となり、他の被験者と時間数の差は見られない。被験者2は2回目データ収集年に兄の中学受験もあって家庭における英語保持活動が停滞したが、3回目のデータ収集年には翌年からアメリカへの再赴任に帯同することが決まったため熱心さを取り戻した。被験者6は初年次、次年次と家族で一日中英語を話す日を週に一回設け、英語の本の音読も日課であった上、外国語保持教室からの宿題である英語日記も他の被験者よりも多くの枚数を提出し、毎回保護者が文法項目の適切さを事前にチェックするなど非常に前向きに英語保持活動に取り組んでいたが、3回目のデータ収集時には中学受験の講習が始まったため英語保持活動量が下がった。

- 18) 財団の外国語保持教室では、小1から小2に進級する際の進級テストで合格者はH(High level)、M(Middle level)、C(Challenging level)に組分けされる。不合格の場合は、帰国子女関連企業での外国語保持教室に通室することになるが、被験者6は次年度の再チャレンジで合格した。
- 19) データ収集2回目の小学校2年生時の外国語保持教室・英語母語話者指導者の評価による。
- 20) 帰国後の年数が経つと被験者によっては語彙や文構造を喪失することに気後れして実験参加を拒んだり、適切な語彙を思い出せないことが障害になり発話がそのものが出来なくなる傾向が予備的調査から予想されたため、語彙そのものは実験者にいつでも尋ねて良いこととした。
- 21) 日本人帰国児童の英語に慣れている TESOL 資格を保つ修士修了の英語母語話者が評価した。
- 22) 語彙テストには American Therapy Publications の Expressive One-Word Picture Vocabulary Test を使用して語彙該当年齢を算出した。除外した語彙項目については友田 (2009b) の註 16 を参照。
- 23) 目標近似値(Target-like Usage)を測定し文法的正確さを示すことが出来る TLU 値は言語喪失研究でよく用いられる指標である。必須文脈の総数+非必須文脈中で使用された形態素・形式の総数を分母に、必須文脈中で正しく使用された形態素・形式の総数を分子に求めることが出来る。例えば、限定詞の誤りに着目する場合、分母は文中で使用されるべき全ての限定詞の数と不適切に使用されたすべての限定詞の数の和となり、分子は、文中で実際に正しく使用されたすべての限定詞の数となる (Reetz-Kurashige, 1999, p.29)。
- 24) 被験者5が3回目のデータ収集時に多用したフレーズの一つは“Froggie, where are you?” “Not here.”で、この組み合わせで出来るだけ物語を表現しようと試みた。
- 25) 通常、割合を二元配置分散分析 (繰り返しなし) には使用できないが、松原 (2008) の逆正弦 $\sqrt{\quad}$ 変換を用いて割合の分散に修正を加えた上で二元配置分散分析を実施した。

## 参考文献

- Andersen, R. W. (1982). Determining the linguistic attributes of language attrition. In D. Lambert & B. F. Freed (Eds.), *The loss of language skills* (pp. 83-118). Rowley: Newbury House.
- Andersen, R. (1983). Transfer to somewhere. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 177-201). Rowley: Newbury House.
- Bahrck, H. (1984). Fifty Years of Second Language Attrition: Implications for Programmatic Research. *The Modern Language Journal*, 2, 105-118.
- Behrens, H. (2009). Grammatical categories. In E. L. Bavin (Ed.), *The Cambridge handbook of child language* (pp. 199-216). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bloom, P. (2000). *How children learn the meaning of words*. Cambridge: MIT Press.
- Brown, R. (1973). *A first language: The early stages*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Chierchia, G. (1998). Reference to kinds across languages. *Natural Language Semantics*, 6, 339-405.
- Cziko, G. (1986). Testing the language bioprogram hypothesis: A review of children's acquisition of articles. *Language*, 62(4), 878-898.
- Fillmore, C. (1982). Towards a descriptive framework for spatial deixis. In J. R. J. & W. Klein (Eds.), *Speech, place and action* (pp. 31-59). London: Wiley.
- Hakuta, K. (1976). Becoming bilingual: A case study of a Japanese child learning English as a second language. *Language Learning*, 26(2), 321-351.
- Jordens, P., De Bot, K., & Trapman, H. (1989). Linguistic Aspects of Regression in German Case Marking. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 179-204.
- Krashen, S. (1978). The monitor model for second language acquisition. In R. Gingras (Ed.), *Second language acquisition and foreign language teaching*. Arlington: Center for Applied Linguistics.
- Lee, K., Cameron, C. A., Linton, M. J., & Hunt, A. K. (1994). Referential place-holding in Chinese children's acquisition of English articles. *Applied Psycholinguistics*, 15, 29-43.
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Penguin Books USA.
- Olshtain, E. (1989). Is second language attrition the reversal of second language acquisition? *Studies in Second Language Acquisition*, 11(2), 151-165.
- Pica, T. (1983). The article in American English: What the textbook don't tell us. In S. D. Krashen & R. C. Scarcella (Eds.), *Issues in Second Language Research* (pp. 222-233). Rowley, Massachusetts: Newbury House Publishers, Inc.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1972). *A grammar of contemporary English*. Essex: Longman Group UK Limited.
- Reetz-Kurashige, A. (1999). Japanese returnees' retention of English speaking skills: Changes in verb usage over time. In L. Hansen (Ed.), *Second Language Attrition in Japanese Contexts* (pp. 21-49). New York: Oxford University Press.

- Slobin, D. I. (1985). *The crosslinguistic study of language acquisition* (Vol. 1). Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Snape, N. (2008). *The acquisition of the English determiner phrase by L2 learners: Japanese and Spanish*: VDM Publishing House Ltd.
- Thomas, M. (1989). The acquisition of English articles by first- and second-language learners. *Applied Linguistics*, 10, 335-355.
- Tomasello, M. (1997). One child's early talk about possession. In J. Newman (Ed.), *The linguistics of giving* (pp. 349-373). Philadelphia: Benjamins.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Tomiya, M. (2000). Child second language acquisition: A longitudinal case study. *Applied Linguistics*, 21(3), 304-332.
- Tomoda, M. (2008). Article usage in the language of Japanese returnee children. *Bulletin of Foreign Language Teaching Association, The University of Tokyo*, 64-83.
- Turner, G. W. (1973). *Stylistics*: Penguin Books Ltd.
- 池内正幸 (1985) 『名詞句の限定表現』大修館出版 東京
- 岡本夏木・清水御代明・村井潤一 (監修) (1995) 『発達心理学辞典』ミネルヴァ書房 京都
- 織田稔 (2002) 『英語冠詞の世界：英語の「もの」の見方と示し方』研究社 東京
- 小野博 (1989) 「海外帰国児童・生徒の英語と日本語語彙力の変化」『異文化間教育』3, 35-51.
- 坂原茂 (1996) 「英語の日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』3, 38-58.
- 坂原茂 (編) (2000) 『認知言語学の発展』ひつじ書房 東京
- 早瀬尚子 (2002) 「英語所有格表現の諸相：プロトタイプ理論とスキーマ理論の接点」西村義樹 (編) 『認知言語学Ⅰ：事象構造』(pp.161-186) 東京大学出版会 東京
- 友田路 (2007) 「外国語保持教室における低学年帰国子女の第二言語喪失—動詞句TLU値分析と退行仮説の観点から—」『言語情報科学』5, 147-164.
- 友田路 (2008) 「年少日本人帰国児童の冠詞使用—前提性と特定性の観点から—」『言語情報科学』6, 227-246.
- 友田路 (2009a) 「帰国子女の第二言語保持への取り組みの変遷：通史的観点から見た帰国子女の量的・質的变化」東京大学外国語教育学研究会 (編) 『外国語教育学研究のフロンティア—四技能から異文化理解まで—』(pp.284-295) 成美堂 東京
- 友田路 (2009b) 「日本人帰国子女の第二言語喪失：冠詞誤用と他者の「前提性」理解」『言語情報科学』7, 159-174.
- 松原望 (2008) 2008年7月31日開催・統計勉強会におけるレクチャー
- 吉田光演 (2003) 「冠詞の定性」『月刊言語』大修館 32, 58-65.